HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	カザフスタン・コリョ・サラム研究序説 ： 呼称とサブアイデンティティの問題によせて
Author(s)	李, 眞恵
Citation	日本中央アジア学会報, 13, 53-54
Issue Date	2017-07-31
DOI	https://doi.org/10.14943/jacas.13.53
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/88315
Type	journal article
File Information	JB013_008lee.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

カザフスタン・コリョ・サラム研究序説
―― 呼称とサブアイデンティティの問題によせて ――

李　眞恵

本報告では、カザフスタン・コリョ・サラム研究序説として、「コリョ・サラム」という呼称による名乗りと名付けについて、また彼らの内部に存在するサブアイデンティティの問題について考察する。

全世界に住んでいる、外部から名付けが行われた他のコリアン・ディアスポラにひきかえ、旧ソ連地域のコリョ・サラムは、ペレストロイカ期の『レーニン・キチ』紙上での議論に始まり、世論化された自発的な自己認識を通じて彼ら自身が自らを「コリョ・サラム」と呼び始めた結果、その呼称が外部によっても受容されたのであり、この呼称が自称・他称として定着した過程はコリョ・サラムに特徴的なものだといえる。従って日本、韓国などの研究において混用されている彼らを指す呼称は「コリョ・サラム」とするのが妥当であると筆者は考える。より厳密に歴史的経緯をふまえるなら、最初の移住、すなわち朝鮮半島から沿海州へ移住する際には、彼らは朝鮮人だったのである。その後、スターリンによって強制移住させられ中央アジアに定着した後には、彼らは中央アジア・コリョ・サラムとなった。ペレストロイカ期に民族意識の覚醒によりソ連のコリアン・ディアスポラの自称として「コリョ・サラム」という呼称が「選択」された。そして、1991年ソ連崩壊と旧ソ連諸国の独立の後、「コリョ・サラム」はいくつもの国家にまたがって存在することとなった。

ペレストロイカ期以降のソ連のコリアン・ディアスポラという意識の覚醒と「コリョ・サラム」という呼称の選択と定着を経て、現代のコリョ・サラムがどのようなアイデンティティを有しているかといえば、それは一枚岩的なものではなく、現在まで続く移住のプロセスの結果、移住の時期や出身地域などによってコリョ・サラム内にサブアイデンティティが存在し、多様化してきていることを指摘する。コリョ・サラム社会に存在するこのサブアイデンティティは、現代コリョ・サラム社会、複数の国家にまたがって存在することになったコリョ・サラム社会の動態を研究する際に、今後重要な意味を持つと考えられる。各国のコリョ・サラム社会を先導しているグループが、どのようなサブアイデンティティを持っているかによって、その社会変容の形態や、あるいは、当該国の制度などに対する対応が特徴づ

けられる可能性があるためである。

ソ連崩壊後、旧ソ連のいくつかの国に居住することになったコリョ・サラムは、それぞれの国の主幹民族中心の国民統合に対し、多様な対応をしながら生を営んでいる。彼らの対応について、各国の国民統合過程やコリョ・サラム社会の変容、双方の関係性やコリョ・サラムと他の民族との関係など多角的な観点から、綿密な分析が求められていくべきであろう。今後、本報告が着目した「コリョ・サラム」という呼称と彼らのサブアイデンティティの問題に加えて、各国の独立以降の諸情勢と密接に関わったコリョ・サラムの対応に、特にカザフスタン・コリョ・サラム社会の対応に焦点を当てて、他の地域のコリョ・サラム社会とは異なるカザフスタン・コリョ・サラム社会の独自性に目配りをしながら、コリョ・サラム社会のあり方をより多角的に探求していきたい。

（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）